

父叔兄（ふしゅくけい）宛 （書簡）安政6年（1859）10月20日（全集第9巻：417頁）

死罪を覚悟して、親族に宛てた「別離」の手紙です。万感胸に迫って来て、涙なくして読めません。吉田松陰の「親思い」の人柄を示す有名な書簡です。以下、読下し文です。

『平生の学問浅薄にして、至誠天地を感格すること出来申さず、非常の変に立到り申し候。嘸々（さぞさぞ）御愁傷も遊ばさるべく拝察仕り候。

親思ふところにまさる親ごころけふの音づれ何ときくらん

- ・ ・ ・今更何も思ひ残し候事御座なく候。・ ・ ・幕府正議は丸に御取用ひ之れなく、夷狄は縦横自在に御府内を跋扈（ばっこ）致し候へども、神国未だ地に墜（お）ち申さず、上に聖天子あり、下に忠魂義魄（ぎはく）充々致し候へば、天下の事も余り御力御落し之れなく候様願ひ奉り候。随分御気分お大切に遊ばされ、御長寿を御保ち成さるべく候。以上。

十月二十日認（したた）め置く。

家大人（かたいじん） 膝下

玉丈人（ぎょくじょうじん）膝下

家大人（たたいじん・兄）膝下

両北堂（母、養母）様随分御気体御厭ひ専一に存じ奉り候。・ ・ ・児玉・小田村・久坂の三妹へ五月に申し置き候事忘れぬ様申し聞かせ頼み奉り候。○私首は江戸に葬り、家祭には平生用ひ候硯（すずり）・ ・ ・十年余著述を助けたる功臣なり。

松陰二十一回とのみ御記し頼み奉り候。』

十月二十日以降、松陰は二通の手紙（23日）を書いて終わっている。生涯630通の書簡である。

そして、処刑前々日（25日）から書き始め、翌日の黄昏時に書き終えた『留魂録』2通が最後の遺文となったのです。この書簡は平常心では読めず、万感胸に迫るものがあります。

合掌

[吉田松陰の名文・手紙を読む【目次】ページへ戻る](#)

[吉田松陰.com トップページへ](#)